

# 日本英語教育史学会 会報

## 304

2021 年 8 月 15 日

**HiSELT** *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
 e-mail: [membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp)

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト <a href="http://www.hiset.jp">www.hiset.jp</a>
---

## 第283回研究例会報告

2021 (令和3) 年 7 月 17 日 (土), 第 283 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 75 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 広川由子氏 (愛知江南短期大学) が「占領期におけるアメリカ対日英語教育政策の形成過程ローマ字表記」というタイトルでお話しされました。続いて榎本剛士氏 (大阪大学)・綾部保志氏 (立教池袋中学校・高等学校) による「「今」から見据える日本の英語教育の過去と未来: 鳥飼玖美子・鈴木希明・綾部保志・榎本剛士編著『よくわかる英語教育学』を素材に」の発表が行われました。司会は久保野雅史氏 (神奈川大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は広川氏, ②は榎本氏及び綾部氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

### <発表 1 の感想>

◆現在の勤務校で教員生活 3 年目となりましたが, 中学校の学習内容から学び直すクリエイティブスクールという学校であるため, 生徒の中に「勉強は嫌いだし, 英語はどうでもいい」といった空気が流れていることに頭を抱える毎日です。「海外の人が日本語を勉強すれば, 自分たちは英語を勉強しなくてもいいのに」といったことを言う生徒にも出会いました。そうした中で, 英語教育の歴史にはアメリカという国との関係性が切っても切り離せないということ学びました。普段接している生徒たちにとって納得のいく理由を少しでも探すためには, 学校で英語を勉強するようになった歴史について簡単などころからでも私自身が知らなくてはならないのだなと思いました。

(aqua)

◆米国側の豊富な一次資料に基づく手堅い分析で, いつもながら大変学ぶことの多いご発表でした。博士論文に基づく御著書が刊行予定とのこと, 今からとても楽しみです。ご発表で気になった点を 2 点申し上げます。まず, 高等小学校の英語教育が「新制中学校の外国語科の基盤とはならない」と断定されていましたが, もっと慎重な評価が必要かと思います。確かに高小で英語教育を実施していた割合はピーク時でも 1 割ほどですが, 高小は旧制中学と比べて母数が大きいので, 1940 年前後でも, ①英語を実施した高小は約 1700 校で, 旧制中学は約 730 校, ②英語の学習人口は高小が約 30 万人, 同年代の旧制中学 1・2 年生は約 19 万人, ③高小は学習者層が多様で, ④週時数が 2~3 時間程度と僅少, ⑤高小の英語は加設科目, 新制中学の英語も選択科目, ⑥旧制中学の教員

の多くが新制高校に異動したのに対し、小学校本科免許所持者の多くが新制中学に異動、などの諸点より、高等小学校の英語教育は旧制中学校以上に、「新制中学校発足による英語教育の一挙的な大衆化の一つの前提条件を整備した」と言えるのではないのでしょうか。出版が間もないとのことでしたので、この点の慎重な検討が必要かと思ひ、あえて申し上げました。

次に、岡倉由三郎は **Basic English** に対して否定的ではなかったようです。論文「英語教育」(1932)では「自分はこの **Basic English** を如何に日本の初等教育に応用し、適用し、以て今日までの英語学習の障礙の根本を除去しようかと、その道を静かに考へてゐる」(30頁)と述べています。また、『英語教育(増補新版)』(1937)に収めた「**BASIC ENGLISH** その他」(初出1933)で「八百五十五で作文を作らせますと、(中略)大変都合好く行く、成績が非常に良くなって都合がいいけれども、唯入学試験と結び付けるとどうなるかと云う問題がある」(360頁、初出28頁)と述べています。この点にもご留意ください。

いずれにせよ、広川先生は本学会の研究水準を高める牽引者のお一人ですので、次はどんな発表をされるのだろうかと今からワクワクしております。(みかん舟)

◆英語を学んでいる私たちにもとても考えさせられる内容であり、現代にも通じる問題だと感じました。(SU 大介)

◆特にベーシック・イングリッシュについて興味を持ったので、調べて知識を深めていきたいと思ひます。(SU 優希)

◆外国語科の成立に至る背景を知ることができました。(SU 漣)

◆1925年からラジオ放送で英語を学ぶことが出来たという点が印象に残りました。(SU 柚紀)

◆戦後の英語教育政策の変遷を事細かに理解することができた。特に教育機会の均等実現や拡大に伴って英語教育を念押ししていた背景がとても興味深かった。(SU 村)

◆授業で英語教育の歴史や変遷について使うことはありましたが、今回のように具体的なデータ、数値に基づいたものはありませんでしたので、大変参考になりました。(SU 舞)

◆英語の拡大や占領対策だけではなく、人間の探究心も英語教育の基盤となっていることを学ぶことができました。(MGU 帆風)

◆占領期において、アメリカが日本人にどのような英語を学ばせようとしたのかということについて、具体的な資料を交えながら発表されていて非常に分かりやすかったです。(SU 夏美)

◆昔の英語教育の活性化の一つにラジオが使われていた事に非常に驚いた。また、戦後当時のアメリカ人が「偏狭な考えを打破するために英語教育をする」という考え方をもち、それが今の英語教育に繋がっている事を考えると不思議なことです。(SU 航太)

◆私は英語英米文学科で英語を学ぶ者なので、学ぶ対象の過去を正しく知ることはとても大切なことであると思ひました。(SU 宥翔)

◆アメリカは英語を日本にどのように教えようとしたのかというテーマのもと、レベルの高い研究だった。(SU 太陽)

◆大学生である私は、小学生の時、外国語という名で英語の授業を受けました。当時はそのことに疑問を持ちませんでした。今一度真剣に考えてみると、なぜ英語しか扱っていないのに外国語と呼んでいたのか不思議です。(MGU そのみ)

◆占領期や過去の英語教育を考えるきっかけになり、更に新しくベーシックイングリッシュにも興味を持つ事が出来ました。(SU 真彩)

- ◆ただ英語を学ぶのではなく、英語を読むことを通して偏狭な考え方を転換できるようにしたアメリカの意向は大変面白いなと思いました。(SU 花純)
- ◆「アメリカは日本人にどのような英語を学ばせようとしたのか」という問いは、私にとって新しい着眼点であり、同時に確かにどういったものなのだろうと興味を持ちました。(MGU 杏香)
- ◆戦前から人々が将来のために英語を学んでみたいと考えていたことに驚いた。言語をただの道具としてではなく他者と通じるための、他者のことを思った言葉として捉えていきたいと思いました。(SU 菜央香)
- ◆アメリカが日本人にどのような英語を学ばせようとしたのか、「英語を読むこと」を通して偏狭な考え方を転換できるような英語を学ばせた、というところで確かにそうした考え方ができるな、と感じました。(SU 葵)
- ◆良い刺激となりました。特に、小学校での「外国語科」の表記について興味を持ったので、自分なりに調べてみようと思います。(MGU 遥花)
- ◆各段階、各種の学校の教育的役割や目的を当時の人がどのように捉えていたかを学ぶことができました。(MGU 瑞帆)
- ◆日本人が英語を学ぶにあたって、どのような歴史的背景があり、どのようにして英語教育が進められてきたのか、詳しく学ぶことができました。(SU 羽琉花)
- ◆占領期の日本の学校における英語教育の歴史について深く学べることができました。(MGU 綾香)
- ◆ラジオ放送による英語教育の普及に興味を持った。(SU 祐馬)
- ◆アメリカの日本への英語教育促進を図った様々な取り組みに感銘を受けました。(SU 祥斗)
- ◆戦前から戦後の時代の流れと、それに伴った英語教育の変遷を知ることができ、とても勉強になりました。(MGU 俊)
- ◆知識不足ではありますが、戦後の英語教育政策は英語を第二言語のように習得させるようなものを想像していたため、そうではなかったと知って驚きました。(MGU 春花)
- ◆英語科と外国語科という名称ひとつからアメリカと日本の世界共通語の認識の話題まで広げられるのかと驚きました。(MGU 勇輝)
- ◆新制中学校の前身と考えられる高等小学校における 1939 年の英語教育の仮設状況が全体の 1 割にも満たしていなかったことには驚きました。(SU 遥)
- ◆基礎知識不足だったため全ての内容を理解することは正直難しかったです。ですが、高等小学校での英語科目は仮説科目であったこと、それが今の日本の英語教育に影響しているのではないかと思います。(SU 佑美)
- ◆占領期の英語教育について学ぶ機会はあまりなかったもので、発表から多くのことを学ぶことができました。1925 年からすでにラジオで英語教育が始まっていたのは、とても意外な事実でした。(SU 将汰)
- ◆日本でも戦前から英語教育への関心はあったということがわかりました。(SU 明日香)
- ◆かなり難しい内容でした。しかし、アメリカがどのような英語を日本に学ばせたかという部分はかなり追及されていて面白いと思いました。国際的なツールとしての英語では今と通じるものがあると思いました。(SU ほのか)
- ◆広川先生の研究発表で興味を湧いたのはラジオ放送による英語教育の普及が戦前において行わ

れていたことです。私は高校の頃から、ラジオ英会話を受けており、ラジオ英会話いつの時代から行われているのかが気になっていました。(SU 飛鳥)

◆高等小学校における加設状況や国民学校高等科の英語教育の状況は、決して十分であると言えなかったが、徐々に英語教育に関する試みが増え、1945 年ごろには、外国語教育の強化がなされたことを知り、意外と最近の出来事なのだなと思いました。(SU nanachan2000)

＜発表 2 の感想＞

◆新学習指導要領の中では、主体的に考える生徒の育成が大きなポイントになっています。勤務校での授業においては、主体的に考えることが難しい生徒ばかりで、どうしたら良いかわかりませんでした。学習指導要領で目指している内容とは離れた授業になってしまっていることについても悩んでいました。しかし、指導要領にあるからといってそればかりに囚われるのではなく、教員自身が「本当にこれで良いのか」を常に考える必要があるということ学びました。生徒たちの現状に合った授業展開にするには、どれだけ多くのスモールステップを積み重ねたら良いのかと悩む日々ですが、考えることを諦めず、自分なりの視点をもって授業を組み立てられる人を目指して頑張りたいと思います。(aqua)

◆綾部先生、榎本先生のご発表はたいへん刺激的で、社会的な視野と、思想的な深みがあり、知的に興奮しました。英語教育を根本から再考させる問題提起で、強く共感し、感動し、「こういう人たちがおられるなら、英語教育界もまだまだ捨てたものではないな」と、英語教育を捨てかけている私は後ろ髪を引かれました。今回発表された『よくわかる英語教育学』を私は英語科教育法の教科書として採用していますが、ぜひ学生たちに熟読してもらいたいです(誤：市川三喜→正：市河三喜など誤植がかなりあるのが教科書としては玉に瑕ですが)。お二人で今回のご発表内容を核としたような次なる本を出されることを願っております。本当に素晴らしいご発表でした。

(みかん舟)

◆ご発表は田邊会長から教えていただいているコミュニケーション学に関する内容で、改めてコミュニケーションが文化や社会と絡み合うものであると感じました。(SU 大介)

◆現在を知るために過去を振り返ることの重要性を認識できました。(SU 優希)

◆英語教諭になりたいと思っていますのでとても勉強になりました。(SU 漣)

◆アメリカがどのような英語を日本に学ばせたかったか、今の英語教育について私は深く知らなかったが、この発表で学び、とても興味が湧きました。(SU 柚紀)

◆私自身も一つのモデルを提示されると批判的に捉えたり、理論的に考えない傾向にあるが、手本をそのままならうのではなく、広い視点で自分なりに批判的し、その本質をとらえる必要があると感じた。(SU 村)

◆研究もコミュニケーションであり、アイデンティティや権力関係と切り離せないというお話が印象的でした。今の私は教員になることをゴールだと設定していましたが、その先に常に研究し続ける姿勢を伸ばして、歴史的観点も取り入れながら、創意工夫をしていきたいです。(SU 舞)

◆英語教育者は決まった型に囚われ授業を行うことは、学習者にとって本当の動機づけになるのか、改めて考えさせられました。英語教育の基盤には「守破離」が重要だと思いました。(MGU 帆風)

◆これからの英語教育において、新しいアプローチ法に飛びつくのではなく、過去の英語教育の歴史を振り返りながら、学びの本質をしっかりと理解していく必要があると思いました。(SU 夏美)

◆英語教育というコミュニケーションの体制の中に私たちがいるという自分が今まで考えもしな

- かったような考えを聞くことができ、貴重な体験になった。(SU 航太)
- ◆英語を単なる言語学習として処理するべきでないことも強く印象に残りました。(SU 宥翔)
- ◆今後の英語教育のあり方について、どちらの先生も私たちにわかりやすいようにその考えを提起され、刺激になった。(SU 太陽)
- ◆榎本、綾部両先生のご発表も将来教員を目指す私にとって興味深いものでした。英語を使った英語の授業に重点が置かれる今、「英語を使わなければならない」ということにプレッシャーを感じています。ですが、綾部先生の「必ずしも日本語を使うのが悪いわけではない」というお言葉に肩の荷が少し降りた気がしました。(MGU そのみ)
- ◆英語教員こそ主体的に。というお言葉が印象的で、小林先生との対話から方針を疑いもせず受け入れることは危険だと感じました。(SU 真彩)
- ◆教員がどれだけ英語教育に開かれた眼と心をもっているかで教育効果が変わるため、教えると言う立場になった時、まず自分が理解してから生徒の環境と結びつけて考えていくことが大事だとわかりました。(SU 花純)
- ◆英語の教師を目指してはいますが、外国語ではなく、自分の母語(日本語)を共通の言語として交流を図るといったことも、将来自分の授業の中で、生徒と考えて行けたらいいなと感じました。(MGU 杏香)
- ◆50分間の聞くだけの授業ではなく、自分で自分を管理できる、そうした考え方はとても重要だと考えました。今の生徒の多くは自分で行動を起こしたりする態度はあまり見られなく、英語の発音も恥ずかしいとなってしまうことが多いです。間違ってもいい、とりあえず行動を起こす、ということがこれからの課題だと思いました。(SU 葵)
- ◆英語教員を目指す身として、英語教育そのものを根本的に考える姿勢を見習って、「主体的な英語教育者」であり続けようと強く思いました。(MGU 遥花)
- ◆英語教育に関して、自分自身も教職の道を目指しているのも、とても興味深かったです。「アクティブラーニング」を推奨する世の中ですが、それが良いとされているから取り入れると言う安易な考えはできないなと実感しました。(MGU 瑞帆)
- ◆今回、綾部先生の現場からの視点に加え、榎本先生のアカデミックな視点を通して英語教育に関する新たな興味や考えや知識を多く吸収することができ、とても刺激的でした。(SU 羽琉花)
- ◆自己表現が必ずしも深い学びに繋がるわけではない、教育観としてはどうなのか、という疑問がとても印象的でした。(MGU 綾香)
- ◆「言語と社会」について授業でプレゼンをしたので、言語とコミュニケーションの捉え方というところで、自分が発表した内容と共通点があり、より理解が深まった。(SU 祐馬)
- ◆学習指導要領に記述されてあることは当然教員に求められているものとして実践しなくてはならないけれども、生徒の実態を観察しながら自分で判断する柔軟さも大切であることを知りました。(SU 祥斗)
- ◆公立の英語教員を目指す立場として、とても考えさせられる内容でした。英語教育とは何なのか、学習指導要領とはどのように向き合うべきなのかなど、とても疑問に思い、またしっかりと考える必要があるのだと考えました。(MGU 俊)
- ◆お話を聞いて、今は私は学習者の立場ですが、英語学習者がどのような認識で教えようとしているのか考えを汲み取っていきたいと思いました。(SU 英菜)

- ◆学習指導要領は遵守すべきものではありませんが、遵守していれば完璧な指導が行えるわけではなく、本当に深い学びになっているか疑い続ける必要があるという点が印象的でした。(MGU 春花)
- ◆現代の学校現場では文部省のトップダウンで全てが決まってしまう、また脱標準化という「構造」自体が標準化されようとしているというお話を聞いて、私が受けてきた教育や今の教職課程で知る内容も当てはまるなど新しい問題意識を得ることが出来ました。(MGU 勇輝)
- ◆英語以外にも身の回りにも日本を話すこと以外の会話方法があるというお話を聞き、とても納得しました。(SU 遥)
- ◆教師は政府や教育委員会から提示されている教育方針、指導要員に従って授業しているのかと思っていました、今やそれも変化しつつあり、これから必要になってくるのは教育者自らが考え、自ら判断する主体性だということ学ぶことが出来ました。(SU 佑美)
- ◆「英語で話す活動」が理想の活動だと考えている人は少ないと思います。私もその一人でした。しかし今回の発表の中で、特定の授業例を盲信することの危うさを感じました。自分の頭で考え、常に疑問を持ちながら授業内容を考えていきたいです。(SU 将汰)
- ◆榎本先生が日本の英語教育における CEFR の受容について発表してくださいましたが、CEFR についてそこまで詳しい知識が無かったので勉強になりました。(SU 明日香)
- ◆綾部先生：導入の部分からかなり興味を惹かれました。「こう変わる」という巧みな表現のところは思わず確かにと言ってしまうました。

榎本先生：コミュニケーションについては様々な形態があると他の授業でも言われています。今のように直接会っての会話がしにくくてもコミュニケーションは取れるというのを自分でも知っていく必要があると思いました。(SU ほのか)

- ◆榎本先生・綾部先生が講義の最後に仰っていた「英語教育」が描く未来の社会像で「これからはグローバル化が一層進み、社会の変化の予想がつきにくくなるので、英語教育はかくかくしかしが変わらなければならない」についてですが、私もその考えには賛成でした。(SU 飛鳥)
- ◆言語とは社会的負荷を帯びており、アイデンティティや権力関係と切り離せないというのは非常に共感できた。(SU nanachan2000)

#### ＜会全体に関する感想＞

- ◆勤務校では対面授業を主としているため、zoom の使用経験が数えるほどしかありませんでしたが、無事に参加できました。ありがとうございます。(aqua)
- ◆オンライン懇親会があったようですが、早めにお知らせ頂けたら参加できたのに、その点が残念です。ぜひ今後もオンラインでも懇親会を企画してください。(みかん舟)
- ◆オンラインでの開催は、発表も見やすく、とてもよかったです。(SU 大介)
- ◆できれば対面でこの研究会に参加してみたいと思います。(SU 優希)
- ◆音声途切れてしまったりして少し支障があり、オンラインは難しいなと思いました。(SU 漣)
- ◆後から入室した方向けに、何度も資料添付をしてくださり、ご配慮に感銘しました。(SU 舞)
- ◆質疑応答の時間が十分に取られていたため、より自分の理解深めるきっかけになりました。(MGU 帆風)
- ◆今回初めて参加させて頂きました。遅れて参加された方のために、何度も資料をチャットで送って頂き非常にありがたかったです。英語教育について深く考えるきっかけになりました。ありがとうございました。(SU 夏美)

- ◆英語に対するさまざまな考えをお持ちの方々から貴重な意見を聞くことができ、非常にためになる会だった。 (SU 航太)
- ◆トラブルもあったがテンポの良い進行でついていけた。1年生のうちからこのようなレベルの話を受けて刺激を受けた。 (SU 太陽)
- ◆休み時間が設けられていたことにより、集中力が切れることなく、聞くことが出来ました。 (SU 真彩)
- ◆例会に参加させていただくのは初めてだったのですが、興味深く学びの多い3時間でした。 (MGU 杏香)
- ◆会全体の進行はとてもスムーズで良かったと思います。 (SU 葵)
- ◆発表された先生方に、疑問に感じたところや興味が湧いたところを **critically** に尋ね、理解されようとする会員の皆さんの姿勢に感銘を受けました。また、広川先生、榎本先生、綾部先生のプレゼンに共通して、英語教育を考えるには歴史を知り、その上でどう自分が動くのかが大切だと感じました。それと共にさまざまな場面で自分の知識不足を実感しましたので、日々学習を続けていきたいと改めて感じさせられました。 (SU スエヒロ)
- ◆初めての参加でしたが、英語教育に携わるプロの先生方のご研究やご意見を拝聴して、改めて貴重な経験をさせていただいているなど実感いたしました。次回も参加させていただきたく思います。 (MGU 遥花)
- ◆オンライン開催により、普段なかなかこうした研究会に参加する機会がない学生にとってとても良い形であると思います。 (MGU 瑞帆)
- ◆未熟な私にとっては、冒頭の会長のお話から最後の最後まで、全てが新鮮で多くの学びがありました。 (SU 羽琉花)
- ◆日本の英語教育はナショナリズムときってもきれない関係であることを学び、英語教育について自分でも調べてみたいと思った。また、戦前から将来の為に英語を学びたいと考えていた事に驚き、祖父母に色々話を聞きたいと思った。 (SU 梨乃)
- ◆こういった会に参加するのが私は初めてでしたので、研究内容はもちろんのこと発表や質疑応答においても大変勉強になりました。今後の大学での授業や自主学習に生かしていきたいと思います。貴重な機会をありがとうございました。 (MGU 綾香)
- ◆オンラインでの開催なので思い通りに進行することは難しそうですが、時間配分も含めてとてもスムーズに思えました。落ち着いて発表を聞くことができたので、教員になることができれば、自分の英語教育に取り入れていきたいと思います。 (SU 祥斗)
- ◆英語教育の歴史や、現在及び今後の英語教育について考えを深めることができました。またオンライン開催であったことで、参加しやすく感じました。 (MGU 春花)
- ◆歴史の流れの認識や言葉のニュアンス一つとっても、皆さんの説得力のある意見が聞くことが出来てとてもよい経験になりました。次回、9月の例会も参加できたらと思います。 (MGU 勇輝)
- ◆発表されていることの内容がとても濃いことはもちろんですが、質疑応答の時間で行われる質問さえもものすごく濃い内容であることにとっても驚きました。 (SU 遥)
- ◆司会の方の回し方が臨機応変でとても勉強になりました。 (SU 佑美)
- ◆今回初めて英語教育史学会に参加させていただきました。過去の英語教育を遡ることで、現代の英語教育の立ち位置や特徴を詳しく分析できる、ということのを会の中で感じました。 (SU 将汰)

- ◆こちら側の問題なのですが、通信状況があまり良くなかったため途中で何度か途切れてしまい、聞けなかった部分がありました。(SU 明日香)
- ◆初めてこういう会に参加させていただいて貴重な時間だったなと思いました。(SU ほのか)
- ◆発表はどれも興味深いものでした。話が変わりますが、学生に意見を求めていただくのはとてもありがたいのですが、他の先生の質問と比べてしまうと、どうしても自分の意見がどこか劣る気がして発言しにくいです。(SU 飛鳥)
- ◆オンライン上の実施だったが、大きなトラブルもなく、スムーズに進んでいてよかったと思います。(SU nanachan2000)

---

### 発表を終えて

広川 由子 (愛知江南短期大学)

この度は、「占領期におけるアメリカ対日英語教育政策の形成過程」というタイトルで発表させていただき、会員の皆様から多くの有益なご意見をいただくことができました。本発表は、9月に出版予定の『戦後日本の英語教育とアメリカ (仮)』の一部を紹介したものです。出版にあたり、以前から気になっていた史料を見つけることができ、皆様にご紹介できたことはよかったと思いますが、すでに先行研究で使用されていますので「新資料」という言い方は適切ではなかったと気が付き反省しています。以後気をつけたいと思います。

ところでその史料は、日本の国立国会図書館の憲政資料室に保存されていました。この間、何度か憲政資料室に請求書を送りましたが、受け付けてもらえず返却されるということがありました。ようやく当該史料を探し当てた時は嬉しくて、はしゃぎました。著書ではより多くの一次史料を紹介していますので、是非、読んでいただければと思います。

江利川先生からは、高等小学校および国民学校高等科の英語科と新制中学校の外国語科との関係について、「簡単に切り捨てない方がいい」とのご意見をいただきました。簡単に切り捨てたつもりはないので是非、著書を読んでいただければと思います。しかし江利川先生のアドバイスをしっかり受け止め、今後は日本国内の事例を丁寧に洗い出しながら、継続して検討していきたいと思えます。ありがとうございました。

---

### 発表を終えて

榎本 剛士 (大阪大学)

共編著者のお一人である綾部保志先生と「共編著書を語る」機会を頂きましたこと、心より御礼申し上げます。今回は参加人数も多く、特に学生さんに向けてお話することができ、大変嬉しく思いました。

歴史を研究する学会に所属していると、「歴史に学ぶ」とはどういうことなのか、ふと立ち止まって考えなくなる時があります。本発表では、「今」の時代の学問的視座から、「批判的」に学ぶための展望を試みました。

どんなに優れた研究(者)も、実践も、必ずコンテキストの中に存在しています。過去の人々、研究、実践が、いかに自らが生きた／置かれた社会・文化・時代に巻き込まれていたかを冷徹に見据えることができれば、自分自身もまた、社会・文化・時代の中の一事例に過ぎない、という自己理解の契機を得ることができます。また、過去の人々、研究、実践が、どのように自らの限界を超



えようとしたか／超えることができなかったかを知ることができれば、私たちもまた、時代の中でより良くもがくことができるのではないのでしょうか。

このような再帰的反省が、これからの英語教員の「主体性」を強く後押ししてくれることを信じています。

---

### 発表を終えて

綾部 保志 (立教池袋中学校・高等学校)

歴史と伝統のある本学会で、貴重な発表の機会を与えていただいたことに心より御礼申し上げます。参加いただいた皆様、フィードバックを頂戴した方々、そして運営に携わる先生方に改めて感謝しております。共同発表者の榎本剛士先生と打ち合わせを重ね、執筆担当箇所の紹介に留まらず、「英語教育」の体制を再帰的に捉える視点について語らせていただきました。これは私自身が教職実践の中で一貫して取り組んできたテーマです。私たちが「英語教育」について考えるとき、語る時、実践するとき、研究するとき、さまざまなアプローチを採ることが可能ですが、そのことで見えなくなる視点があり、その不完全さを社会文化的、歴史的な枠組みに基づいて思考することが自文化や自集団を再帰的に捉えることにつながります。教育というジャンルでは、単純な未来社会像が措定され、ナイーヴな語りで自己正当化が行われる傾向があります。「一歩下がって広い視野 (大局) で考える」(Step back and look at the bigger pictures.) という自己相対化の精神が日本の「英語教育」で根付くよう、これからも自分にできることを続けていきます。今後ともよろしくお願い致します。

---

## >> 事務局より

### >> 事務局の「夏休み」について

9月の第2週・第3週は学会の事務局を置いている研究室を不在にしますので、勝手ながら事務局の業務は電子メールで対応できるものに限らせていただきます。この間に郵便・電話・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は9月21日(火)以降となりますが、どうぞご了承ください。

### >> 年会費の納入について

年会費の納入につきましては、これまでに多くのみなさまにご協力いただいております。ここに厚くお礼申し上げます。なお、所属機関等を宛名とする領収証をご入り用の方は個別に事務局までご連絡ください。

過年度分の会費をお納めくださったみなさまに学会誌をお送りする作業に遅延が生じ、ご迷惑をおかけしております。9月の第1週には完了の予定ですが、今しばらくお時間を頂戴しますことをお詫び申し上げます。

---

## >> 『日本英語教育史研究』第37号投稿論文の募集 (再掲)

『日本英語教育史研究』第37号投稿論文募集中 (締め切りは9月30日)。詳しくは学会ウェブサイト ([www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)) をご覧ください。

連載：日本英語教育史学会「会報」300号の歩み(4)

## 会報編集のこと

若手 保彦

私が初めて会報編集を担当したのは 257 号 (2013 年 6 月号) でした。前任の馬本先生から会報編集を引き継ぐことが決まったのはその数ヶ月前の理事会でした。学会関係者であればどなたもご存じの通り、会報 (旧月報) の歴代担当者はいずれも緻密で丁寧な仕事をされる方ばかりです。担当を命じられた時は、「仕事が雑でミスが多い私に担当が務まるのか？」と不安になったことを覚えています。

不安は早速的中し、最初の号の編集で大迷惑をかけることになります。本当に恥ずかしい話ですが、当時は会報編集の仕事について、受け取った原稿を編集・印刷・発行すればいいと考えており、原稿依頼作業が必要なことにさえ気づいていませんでした (ある地方学会で学会誌編集の仕事を担当した際、原稿依頼の文書が事務局から出ていた関係で、そういう仕組みだと思い込んでおりました)。そのため、全国大会の原稿依頼が開催の 3 週間後という、本当に迷惑なことをしてしまいました。また当時はワードファイルを PDF にする技術さえ習得しておらず、ワードで作った原稿を複数のファイルに分割して関係の先生方に送っている有様でした (前述の地方学会誌の編集では写真の掲載がなかったため、ワードでもデータ量不足に陥ることなくメールのやりとりができていました)。さらに、例会のアナウンスの関係で時間に追われて発行編集作業をしている時に家族の不幸があったこともあり、結局、この号の会報編集や発送作業は、未完成の状態でも馬本先生に代行していただくことになりました。先生方に迷惑をかけてばかりの会報編集デビューでした。

その後も様々なミスを重ねて今に至っているのですが、そんな状態でも、歴代の担当者である河村先生や馬本先生、江利川先生には温かくフォローしていただいただけでなく、作業に関する助言もたくさん下さいました。特に印象に残っているのが会報の「三つ折り線」です。私が担当する前に発行されていた会報は、次ページのように、学会公式ウェブサイトの下にある線 (矢印で示してあります) で三つ折りができるようになっていました。これは見た目もきれいですし、三つ折り作業を行う際にも非常に便利です。こういう気づきにくい細部への心配りをさりげなく行っていたところに先生方のすごさを感じました (残念ながら、会報のロゴや配置が変更された現在、私の編集技術の拙さもあってこちらは再現できておりません)。

また前号の EDITOR'S BOX でも触れましたが、河村先生からは次ページで示したような感想の段組を廃止するご提案をいただきました。段組廃止を実行に移したのは前号 (会報 303 号) からですが、早速作業時間の短縮を実感しています。

歴代担当者や理事の先生方の様々な配慮のおかげで、以前と比べ、会報編集の作業は大幅に負担が軽くなっています。最も顕著な例は紙媒体の会報の頻度と発行部数です。私が院生だった時代は毎月 150 通近く送っていたと伺っていますが、これだけの分量を全て三つ折りして封筒に入れて糊付するとなると (単独であれば) 発送だけで数時間を要したことと思います。それが現在では電子化が進んで紙媒体の発行部数は 30 通以下になり、私一人でも 1 時間くらいで行うことができるようになりました。

また例会や大会がオンラインで開催されるようになったことで、写真の編集作業や手書きの感想を (大変言いにくいのですが) 「解読」して入力する作業がなくなりました。会の参加者や読者に

としては写真がないことや会場で感想を書けないことを残念に思われるかもしれませんが、実はこれらも編集作業の時間短縮につながっています。「三つ折り線」のアイデアのように、読者へのサービスと編集作業の効率化を追求していくことが、会報発行を継続する上での鍵だと個人的には感じています。

## 日本英語教育史学会 会報

256

2013 年 4 月 15 日

**HiSET**  
Society for Historical Studies of English Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

学会ウェブサイト <http://hiset.jp/>

日本英語教育史学会 (代表 竹中龍範)

【事務局】和誠堂文庫

〒121-0011

東京都足立区中央本町 5-10-22

Tel &amp; Fax: 03-3886-8804

e-mail: [membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp)

口座 (名義) 日本英語教育史学会

ゆうちょ銀行: 00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行 千住中央支店

(普通) 0997182

### 第242回研究例会報告

2013 (平成25) 年3月17日 (日)、キャンパスプラザ京都 (京都市) において、第242回研究例会が開催されました (参加者29名)。

研究発表は、田中正道氏 (広島大学名誉教授) 「広島高等学校 (旧制) を受験」 (司会: 隈 慶秀氏・福岡県立明善高等学校)、青田庄真氏・江利川春雄氏 (和歌山大学) 「戦前期における英語熟達者の学習方略に関する研究」 (司会: 佐藤恵一氏・工学院大学非常勤) の2発表が行われ、活発な議論が交わされました。

以下に出席者の感想を掲載します。ご参照ください。(①は田中氏、②は青田・江利川氏に対する感想です。)

◇ ◇ ◇

◆①田中先生の旧制高校入試問題シリーズで広高を取り上げて頂きましたが、ご発表中に広高のものよりも三高の方が良いというご意見があった点について、これを拡張して一定の基準により各校の入試問題を比較分析したご発表を期待しております。

②面白い研究で、どのように拡げて頂けるか楽しみにしております。教授学習ということを考えた場合、教授者からの指導によるストラテジーと学習者が自ら獲得したストラテジーとの関係も分析しなければならないのではないかな等々、切り口はいろいろなものがあるかと思えます。<Dragon>

して頂けると更に良かったと思います。貴重なお話を難うございました。

②面白い、今の英語教育に繋がる楽しい発表でした。今後の研究に期待しております。

&lt;K.S.&gt;

◆①いつもながらの文明批評を内蔵された、ひょうひょうとしたご発表は大変興味深く、勉強になりました。GHQ が旧制高校を目の仇にしていたという件りには、TPP によって今後現代日本にも形を変えて現出する現象ではないかという感想をもたされました。

②名人・達人・熟達者という概念規定自体がまことにあいまいさを内包していると思いま

### )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 284 回研究例会 2021 年 9 月 18 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 285 回研究例会 2021 年 11 月 20 日 (土) 未定
- ◆ 第 286 回研究例会 2022 年 1 月 8 日 (土) 未定
- ◆ 第 287 回研究例会 2022 年 3 月 19 日 (土) 未定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (1 月発表希望であれば 10 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

## 日本英語教育史学会 第 284 回 研究例会

日時：2021 年 9 月 18 日 (土) 14:00~17:00 オンライン開催

\*申込方法は学会ウェブサイト内の「オンラインによる研究例会 参加方法」をご参照下さい。

講演

### 回想 英語名人 河上道生先生のこと

田邊 祐司 氏 (専修大学)

【概要】「同時通訳の神様」 國弘正雄氏 (1930~2014) が「英語のライバルは？」と尋ねられた際、即座にその名を挙げたのが河上道生先生 (1925~2012) だった。河上先生は英語学、英文法・語法を専門にされたが、その英語力は机上に留まらず、実践でもすさまじい切れ味を誇った。先生はどのようにして國弘氏を驚嘆させる英語運用能力を身につけられたのか。ご逝去から 9 年経ち、若き英語学徒の中には先生のことを知らない世代が増えている。今回は河上道生という英語名人の歩みと業績、そして何よりも、その英語学習法、習得の信念など、先生から直接、伝授されたことを元に、あえて個人的な思い出を交えた回想録をお届けする。

研究発表 英語教授研究所ニュースレターから H. E. Palmer の現代性を読み解く

久保野 りえ 氏 (都留文科大学)

【概要】「英語の授業を英語で」が言われ始めたのは、約 100 年も前のことである。その始まりに大きな役割を果たした Harold E. Palmer のことばの多くを、Palmer が所長を務めていた英語教授研究所 (現在の語学教育研究所) のニュースレター The Bulletin of the Institute for Research in English Teaching に見ることができる。そこに残された Palmer の「生のことば」を拾い上げることで、現在の英語授業に「未だに何が足りていないのか」のヒントを見つけたいと考える。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

**EDITOR'S BOX** 第 283 回の研究例会には多くの学生の参加があり、これまでにない数の感想が寄せられました。「うれしい悲鳴」とはこういうことなのだな、と実感する貴重な機会になりました。／コロナの第 5 波の感染拡大のピークがまだ見えない状況です。みなさま、どうかお気をつけください。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [geppo@hiset.jp](mailto:geppo@hiset.jp))